

郷土摂津 いにしえ通信

第44号 平成13年12月1日

発行 摂津市教育委員会 生涯学習部生涯学習課

〒566-8555 摂津市三島一丁目1-1

TEL (06) 6383-1111 TEL (0726) 38-0007

ホームページアドレス <http://www.city.settsu.osaka.jp/>

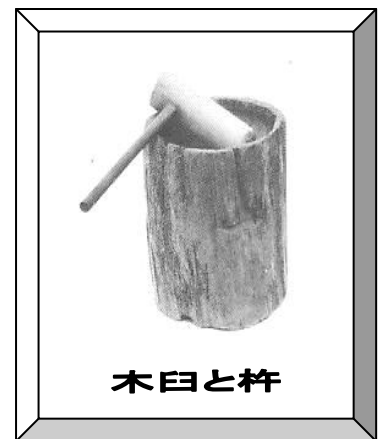
第9回12月
大晦日・餅つき

わがまち ちょっと昔の生活

大晦日 月の終わりは、30日で、これを訓読みにはすと「ミトカ」なり、それが転化して「ミソカ」になったと言われています。そして1年の最後、12月の「晦日」を「大晦日」と言われるようになりました。この大晦日から元旦にかけての夜が「年越し」で、心身を清め、終夜眠らずに新年を迎えるものだと思われていました。大晦日に早寝するとシワになるとか白髪になるなどとも言われていたようです。何れにしても、去り行く年を振りかえり、いつまでも回顧回想し、別れを惜しみ起き続けていたようです。



餅つき 餅はもち米を蒸して臼でついたものです。米のほかに粟（あわ）・黍（きび）・ナラの実・トチの実を材料にしたものがあります。餅という語源については、長もちするからとか、もち歩くことができるとか、満月からきたのだとか諸説があるようです。正月用の餅は暮れの12月25日頃からつくところが多く、29日につくと「クモチ」、31日につくと「一夜餅」といって避けるところが多かったようです。市域でも29日は「苦の餅をつく」といって避けられ30日あたりが多かったようです。



木臼と杵

摂津市域の 聞き取り調査から

○当時の大晦日はたいてい麦飯とイワシ、年越しのソバかうドンを食べます。晩は子どもも大人もヨーネンコという遅くまで起きて、カルタや百人一首で遊んだり酒を飲んだりします。除夜の鐘が鳴ると、雑煮でお祝いして、お宮さんにお参りします。それから家に帰ってご先祖さんにお参りします。 《鳥飼中》

○うちは今でも、年越しと大晦日に家中で麦ご飯を食べています。年の変わり目に贅沢をいましめるためです 《鶴野》

このコーナーでは、新しい史料の発見で、明らかになりつつある鳥飼なすの由来を、前号と合わせて4回シリーズで紹介합니다。

パート2 鳥飼なすの由来について

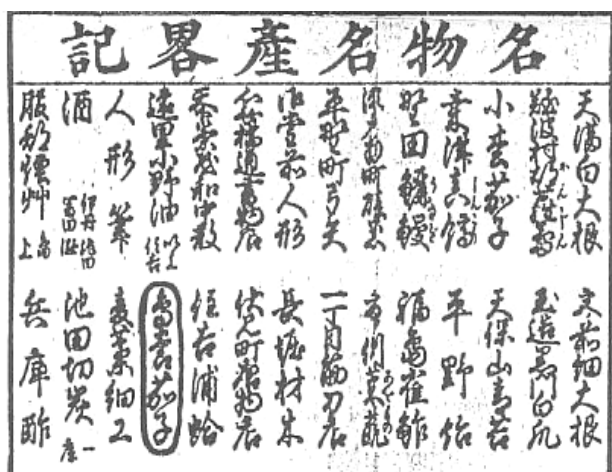
野菜市場への運送特権の緩和(前号よりつづく) 1741年、大坂奉行所は大坂市中に運送特権を持つ川船の利権を一定維持しながら、青物のうち、いたみやすい野菜であるなす・菜類・大根・うりの四品(青物四品といわれた)に限って、摂津114か村に村舟・屎(肥)舟を使って、天満青物市場に直接出荷することを許可したのです。ただし、この頃の鳥飼地域で栽培されていたなすは、長なすであったか、丸なすであったかははっきりしませんが、後世から判断しますと、丸なすの一種であったと考えられます。

この許可された村々のうちには、淀川右岸沿い、安威川沿いにあった現摂津市域の村々が含まれていたことはいまでもありません。鳥飼村民が舟を使って直接市場になすを運搬することができるようになったことは、運賃や積み替え作業などの簡素化となって、村民がなすの商品開発に積極的に関与する条件となりました。

栽培条件の改善と生産技術の向上 低湿地であった鳥飼7か村域で、三か村井路、鳥飼井路などの治水施設が、18世紀をつうじて再編・整備され、湿地の排水が改善されるようになりました。そのことによって、本来米単作地帯であった鳥飼7か村のうち、鳥飼西村などの一部村域で畑作もできる中田が成立・拡大していったことが、なすの栽培を促進することにつながったのです。

それに加えて、同じ頃、大阪全域での農業技術と生産力の向上により、余剰労働が生まれ、集約的な農法の開拓によって商品作物の地域特産化が可能となったのです。

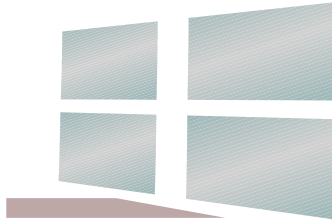
このような状況が、1836年に刊行された『新改正摂津国名旧跡細見大絵図』に掲載されている「名物名産略記」(下図)に摂津国の各地で各種の名産が特記されるようになった背景です。



鳥飼地域でも同様な向上が見られ、それまで栽培されていた丸なすに品種改良が加えられ、商品作物として一定の定着をみた結果、史料に鳥飼なすが「鳥養茄子」として記載されることになったのです。

その品種の特質とは何であったのでしょうか。現在から類推しますと、他のなすは火を通すと表面が変色し易いが鳥飼なすはそうでなかったこと、また果肉がち密であるため火を通して煮崩れしにくいことが商品として消費者の嗜好に合ったと考えられます。

(つづく) 寄稿 鳥飼新町 菅 富士夫氏



郷土史コーナー

意外と身近な郷土の歴史を紹介していきます。

味生(あじふ)の歴史

一津屋の城

元亀元年(1570)9月、織田信長が三好党や本願寺と合戦して帰るさい、その先発隊が拠った「一屋の附城」、さらに天正6年(1578)12月、荒木村重が信長にそむいたとき、信長方の高山右近が「御取出御在番衆」として在陣した「ひとつ屋」(『信長公記』巻11)、また天正7年5月、中川清秀と高山右近との「堺目出入の節の書附」(『中川氏年譜』巻1)にあります「一屋城」などの記事から、一津屋に城が存在したことが知られています。

附城は、本城とは別に要所に築いた出城をいう場合がありますが、ここでは敵の城を攻めるために敵陣と相対して築いた向城の意で、攻撃用の城でした。一津屋は元亀元年以来、信長方の拠点となっていました。また、『掇津志』には「一津屋の塁は池田輝政等これに拠る」という記事もありました。現在、一津屋地区で城址は判然としませんが、旧小字名に浜城・高ノ城があり、一津屋城との関連も考えられます。

では、城とは一般的に「お城」と呼び、またその言葉のイメージから浮かんでくる城とは、大阪城や姫路城など大きな天守閣がそびえ、石垣をもち、堀などを備えた大規模なものを想像します。これらの城は、戦略的に重要な拠点として残されてきた近世城郭の代表的な城ばかりです。ほとんどの小さな城は、元和元年(1615)幕府の大名統制策として出された「一国一城令」によって取り壊されてしまいました。「城」という字は「土」で「成」と書きます。これが示すように、もともとの城は人が地表を掘り、土を積む土木施設でした。人々は、山地や台地、あるいは集落の周囲に堀や土塁をめぐらせて、戦火から身を守ったり、敵を攻撃したものでした。

弥生時代から近世に至るまでの城は、約25,000を超えるといわれています。一番多く造られたのが中世で、小規模の山城のほか、多くは豪族の居館の周囲に泥田掘や石垣、土塁、柵、塀、櫓などをそなえた面積は方1町か2町(1町幅は約109m)程度の城でした。また戦国時代はとくに戦乱の世として、城がもっとも多く使用された時期であり、機能的にも多様化していく時代です。たとえば、本拠の城、境界防衛の城、連絡用の城、退守の城、攻撃用の城、陣営の城、住宅の城などです。

一津屋の城も天守閣を要さない小規模な城だったようです。

担当 (茗荷)



(参)『掇津市史』『復原図譜・日本の歴史』理工学社1992
『日本の城』世界文化社1996
『歴史と旅・日本城郭事典』秋田書店

←石山合戦(石山軍記から)掇津市史・第4章・図135

第9回

埋もれた
摂津市の歴史

発掘調査で明らかになっていく摂津市の埋もれた歴史をシリーズで紹介していきます。

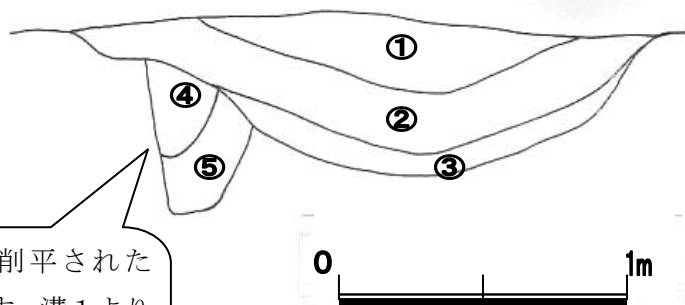
平成12年度
蜂前寺跡
2次調査

溝1～3検出状況(東から)

◎ I 区の溝1～3の検出状況です。左に大きな溝1が、溝1に沿う形で溝2が、右に溝3が見られます。各遺構の配置については、前号調査区平面図・遺構配置図をご参照下さい。

確認された遺構(いこう) このときの発掘調査では、限られた調査範囲で比較的多数の遺構が確認できました。さまざまな用途で掘られた穴(土坑)がI区で103個、II区で3個見つかりました。これら土坑の中で等間隔に掘削され、柱穴と想定されるものが20個で3棟の建物跡が確認されました。南北に溝が4条、東西に2条が確認されました。調査区の東端で井戸が1基、南端では土坑墓(どこうぼ)が3基検出されました。これより各遺構の調査成果について紹介していきます。

発掘調査で確認された溝 I区のほぼ中央に東西に流れる溝1が見つかりました。幅約2.3m、深さ約60cm～70cmです。埋土は大きく3層に分けられます。上層は地山の灰黄色粘質土がブロック状に入る堆積です。中層は灰オリーブ色粘質土、下層は灰色粘質土です。これらの状況から中下層は生活の中で長期間で埋まり、溝が廃絶するときに周辺の地形を削り一気に放りこんだような状況が確認されました。II区ではこの溝の東西方向の延長が確認できました。また南北には溝状の落ち込みは確認されましたが、コーナーが調査区の外側に位置すると想定され、南北方向の溝とは断定できない状況でした。 担当 (伊部)



溝1に削平された柱穴です。溝1より前代の時代に掘削されたものです。

溝1内埋土断面図

- ① 灰黄色粘質土
(地山ブロック含む)
- ② 灰オリーブ色粘質土
- ③ 灰色粘質土
(マンガン班含む)
- ④ オリーブ灰色粘質土
- ⑤ 淡黄色粘質土
(マンガン班含む)